



2008年度後期 キャンパスニュース

福嶋教授が水文・水資源学会の平成20年国際賞、第62回毎日出版文化賞をダブル受賞

平成20年9月11日 研究・交流センター所属の福嶋義宏教授が、水文・水資源学会より平成20年国際賞を授与されました。本賞は国内外で顕著な研究業績を挙げた者に贈られる権威ある賞です。GEWEX/GAMEという、気象学と水文学の双方に関係する気候形成への陸面の役割を明らかにする国際的な観測研究を熱帯から寒帯までのユーラシア東部地域で、国内外の研究者と共同して展開。そのまとめ役を果たし、永久凍土に覆われたシベリアのタイガ林での熱・水循環に関して新しい知見をもたらしました。この研究は、黄河の水が消失する「黄河断流」の原因解明と、その環境への影響解析につながり評価されたものです。

また、平成20年11月6日には著作の「黄河断流～中国巨大河川をめぐる水と環境問題」が毎日出版文化賞を続けて受賞。同賞は第二次世界大戦の終戦後間もない1947年、出版文化の向上を願い創設され、出版点数が拡大する中で、毎年、優れた出版物を選び顕彰しています。



頑張れガイナレ鳥取! J2昇格を目指す地元サッカークラブに寄付金を贈呈

平成20年9月25日 J2昇格に向けて毎試合熱戦を繰り広げているSC鳥取の塚野真樹社長に、本学の教職員有志30名を代表して古澤学長から寄付金を贈呈しました。贈呈式には塚野社長と同クラブ広報担当の濱田正人さんが来学。塚野社長は、「寄付を頂いて大変有難い。今年でJFL加入8シーズン目を迎える今季の残り8試合を全力で戦い、J2昇格を目指したい。」と力強く抱負を語られました。また、広報担当の濱田正人さんは、本学第一期の卒業生であり、在学時から昨年まで活躍していた元プレイヤー。塚野社長は、「学生の皆さんにも応援・協力をお願いしたい。クラブとして子供達の情操教育にも力を入れており、濱田さんのような地元出身の選手

がどんどん入団してくれることを期待しています。」と熱いメッセージを述べられました。



シンポジウム「高効率ごみ発電による低炭素社会の実現」を開催しました

平成20年10月21日(東京会場)、10月23日(大阪会場)で、高効率ごみ発電による低炭素社会の実現をテーマにした国際シンポジウムを開催しました。研究・交流センター田中教授による講演の他、環境省による政策解説や、東京都・大阪市、また海外からスイス、オランダの事例が紹介されました。田中教授は低炭素社会、循環型社会の実現に向けた取り組みとして、超広域からのごみ回収、高効率発電によるエネルギー回収、プラスチックの燃料化などを提案。講演終了後のパネルディスカッションでは、会場に訪れた参加者から多くの質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。



米子鳥取間駅伝競走初参加。大健闘!

平成20年11月8日、9日 米子 - 鳥取間駅伝競走大会が行われました。初参加の本学は、日頃の練習成果を存分に発揮しました。1日目は米子市の東山陸上競技場をスタートし倉吉市菅陸上競技場まで62km、2日目は倉吉陸上競技場から鳥取県庁までの54.5kmの総距離116.5kmを7時間26分45でゴールし、堂々36位(60チーム参加)という好成績を収めました。



「安土城惣見寺(そうけんじ)再建学生コンペ」にて本学チームが優秀賞

平成20年11月22日 滋賀県立安土城考古博物館(滋賀県蒲生郡安土町)で開催された「安土城惣見寺再建学生コンペ」にて、本学チーム(代表:環境デザイン学科4年岡垣頼和、指導:同学科浅川滋男 教授)が優秀賞を受賞しました。同コンペは、惣見寺再建計画委員会(主催:惣見寺)が実施。審査会は3時間以上におよび、本学の岡垣頼和さんの作品が、最優秀賞に次ぐ優秀賞に輝きました。惣見寺は織田信長が創建し、江戸時代にそのほとんどが焼失。同寺が暖めてきた再建への思いを「若い学生たちの自由な発想に期待」し、このコンペティションを企画・募集されたものです。岡垣さんの作品は、惣見寺本堂とほぼ同年代の類例を徹底的に渉猟し、そのデータを紡ぎあわせるオーソドックスな「復元」の手法によるもので、考古学・建築史研究者から強い支持を受けました。また、信長のご神体である「益山」の配置に関する理解についても高い評価を獲得しました。



中国太倉市本学視察

平成20年11月27日 鳥取市交流自治体である中国太倉市の訪問団5名が交流事業の一環として来鳥、本学を視察に来られました。はじめに、古澤学長が「鳥取環境大学は、「環境」と名のつく大学として、環境マインドを持った学生の育成と地域社会への貢献に努めています。」と挨拶し、続いて、訪問団団長で太倉市人民代表会常務委員会 王副主任より「ハイスピードで経済発展している中国においても環境保護は共同の目的であり、この機会に鳥取環境大学の理念を太倉市に持ち帰りたい。今後、太倉市健雄大学と鳥取環境大学との提携・交流を期待しています。」と述べられました。



高大連携による「ミニチュア・レスキューロボット」競技会が開催されました!

平成20年12月25日 米子工業高校と本学との高大連携教育プログラムの成果発表会として、「ミニチュア・レスキューロボット」競技会が開催されました。本学は米子工業高校と鳥取情報ハイウェイを通じた遠隔授業の実施など連携授業を続けています。そしてこのたび、高校生と大学生が同一テーマを通じて、課題解決能力を高めることを目的とした「課題発見解決型」教育プログラムを実施。社会人として必須とされる「自分で能力を解決する能力」を互いに刺激し合い、養うことを目的として昨年度から継承されています。競技は、被災地に見立てた「建築物エリア」「丘陵・住宅エリア」など4区画に区切られた囲いの中から、それぞれが作製したロボットにより10分間以内に人形を救出するというもの。米工高(電気科3年)2チーム・本学(情報システム学科)2チームの計4チームが挑戦し、各エリアに散在しているがれき(発泡スチロール製)を丁寧に除去しながら、人命救出に向かいました。本学チームはコントローラに携帯電話を使うなど、独創的な視点からロボットを作製。指示どおりに作動しないなどの予期せぬトラブルに見舞われながら、その対処法をその場で模索しながら解決へと向かう「課題発見解決型」の競技会となりました。



本学学生が最優秀賞受賞!平成20年度鳥取県青少年建築アイデアコンテスト。

平成21年1月17日 社団法人鳥取県建築士事務所協会が主催する「平成20年度鳥取県青少年建築アイデアコンテスト」において、環境デザイン学科3年 中村未来さんが最優秀賞を受賞しました。このコンテストは、同協会が鳥取県民の皆さんに親しまれる公共施設の実現と、建築に携わる人材の育成を目的として、県内の青少年から新鮮なアイデアを募集。本年度のテーマは「倉吉駅南口駅前広場シェルター」。JR倉吉駅の改修と地域交流センターの新築に併せて、全面的に改修される駅前広場の顔に

ふさわしいシェルターのアイデアが課題とされてきました。今後は中村さんの作品をもとに、専門家の手を経た後、シェルターが広場に設置される見込みです。



関西からの進出企業等と協定書を締結しました。

平成21年1月26日 N700系のぞみの揺れ防止装置など電子機器の開発・設計・製造を行っているマルチ株式会社(本社:兵庫県西宮市)の鳥取オフィス進出に伴い、本学が有するシーズ(「種」となる新技術)の商品化や新たなイノベーション(技術革新)商品の開発を目的として、同社と本学、そしてこのたびの進出を支援する鳥取県の平井知事と鳥取市の竹内市長との間で、協定書を取り交わしました。同社代表取締役会長の浅田敏躬氏は鳥取県伯耆町(旧・岸本町)のご出身で、ソニー株式会社を経て昭和49年に創業。同社には本学卒業生も勤務しており、来年度も4人の採用が内定中です。浅田会長は「研究成果とマーケットがつながる仕組み作りによりニーズを取り入れる。環境産業分野にはニーズ創出の機運があり、鳥取環境大学の持つシーズを利活用してマーケットとの架け橋になりたい」と鳥取オフィス開設の思いを述べられました。また、協定締結後の記念講演会には一般の方や多数の教職員・学生が聴講。満席となった会場は熱気に包まれました。



「鳥取環境大学との産学官連携に関する懇談会」が開催されました。

平成21年2月24日 鳥取環境大学を支援する会主催による「鳥取環境大学との産学官連携に関する懇談会」が、完成間もない鳥取産業会館・鳥取商工会議所ビルで開催されました。同懇談会では、学生による研究発表や学生

ISO等の日頃の学生生活動の報告が行われました。また、古澤巖学長より、新学科開設やバイオマス系廃棄物(BDF)利活用に関する研究などの近況報告も行われました。なお、本学の産学官連携活動に尽力し、本年度をもって退職する鷲野翔一研究・交流センター長より「本学が皆様を支えられていると改めて痛感しています。皆様のご支援に深く感謝し、その期待に応えるべくより地域に根ざした教育・研究活動が続くことを願います」と退任挨拶があり、交流が一層深く行われることを、参加者で共有しました。



低炭素循環型社会の構築に向けて、地域ぐるみの産学共同研究スタート!

平成21年3月30日 平成20年度に文部科学省が募集した補助事業「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に「廃棄物系バイオマスの利活用を核とした低炭素循環型社会の構築に関する研究」を応募し、採択されました。(平成20~22年度)。研究の一環として、トスク株式会社(本社:鳥取市)と本学が共同し、鳥取市内にある同社3店舗を通じて廃食用油を回収する研究を行うため覚書を取り交わすとともに、BDF(バイオ・ディーゼル・フューエル)精製装置の運転開始式を行いました。この新しい精製装置の能力は日量100リットル。本学の従来機(日量40リットル)の2.5倍の精製が可能となり、一層の利活用が見込まれています。覚書締結式に際して同社代表取締役社長の依藤氏から、「地元とともに、暮らしとともに」をモットーとしているトスクが協力することで、この研究が深く地域に根付くことを念願しているのご挨拶を頂きました。今後は先述の3店舗の出入口に廃食用油回収ボックスを各2台設置し、持参されたお客様に同社の買い物ポイントを1ポイント(=1円)進呈するなどして、廃食用油の回収率向上と環境問題に対する意識の向上を目指していきます。

